

1 親族用語で相手を呼ぶことも相手を三人称扱いにしていると言えますし、これまで人称代名詞として挙げられた語彙の殆どが、ヨーロッパ語のそれとは違って、〈僕〉や〈俺〉、〈貴様〉や〈君〉などを除くと、相手のいる場所や角色を示す言葉の転用だということが明らかです。つまり日本語ではヨーロッパ語とは違って直接話の相手を言葉で指すことを極力避けて、その人の社会的地位、自分との家族関係、そしてその人のいる場所や角色をいうことで、間接的に相手だということを示すのです。相手との関係はむき出しの直接的なものより、やんわりとした間接性のあるほうがよいというこの感覚は、古い日本の作法で人と話をするとき相手の顔を真正面から見据えることは無作法であり、また相手の目を直視しつづけることは避けるべきだとしていたことにも窺えます。つまり日本人の平常の人間関係のあり方を少なくとも言葉と仕事の点から見れば、対立対決の欧米型とはほど遠い柔らかいかなものと言えるでしょう。

2 以上のことから私は欧米の言語に見られるような一人称と二人称の交換による対話とは、言葉というボールを二人が互いに相手を狙って打ち合うテニスのようなものだと思います。ゲームの進行中、球の打ち手と受け手がくるくると変わるように、二人の間では人称が一人称と二人称の交替を繰り返すのです。

3 これに対していつも私は日本語での対話とは、スポーツでいえば相手を直接狙わないスカッシュにたとえられると表現しています。この場合、話し手の言葉はまず一度壁に当てられ、それが反射して相手のほうに流れていくわけです。ですからこのときの相手は本来の二人称としての相手ではなく、すでに他者つまり三人称なのです。そしてこのことを別の角度から見ると、日本人は多くの場合相手がいるときでも、話はそれ自体直接の相手不在の、どちらかと言つと独り言の性質を持っているとも言えるのです。

4 このことが概して日本人は議論が下手だと評されることと無関係でないと思つています。相手をよく見て何処が弱点で何処を突けば勝てるかという、相手を自分が望むように動かして追いつかぬ戦術が弱いです。これは当然で、相手がいながら、なるべく相手を見ないようにする文化的な癖が、対決的場面をなるべく避けようとして、相手がこちらの発言に対して少し気色ばんだりすると慌てて「そんなつもりで言ったのではないのです」「などと相手をなだめようとする。そもそも対話の仕組みそのものが対立対決的でなく、同じ社会的な枠組みを共有する仲間としての相手にむしろ同意協調することを前提としているためです。

5 また日本語では対話や議論が対立的になりがちという理由も、自称詞と対称詞が多くの場合話し手と相手の間の上下関係を構造的に取り込んでいるからだと思います。父親と議論するような場合、相手を「お父さん」と呼ぶことは、そのことで自分を息子つまり相手の目下と自己規定してしまうわけですから、初めから立場が弱いわけです。あるアメリカの論文で、父親をどう呼ぶかの調査の対象となったある青年が、自分から親と議論するときには、絶対「Father」と呼ぶだけだといっていました。一貫して you を使うことについては答えていますが、日本語では言語上これが出来ないのです。

鈴木孝夫 『日本語教のすすめ』二〇〇九・一〇

【要約トレーニング】

- ① 文章全体を読む。
- ② 全体を三つの段落に分け、三つの段落それぞれの役割を考える。
- ③ 三段落それぞれの中で重要な一文に線を引く。
- ④ 文章全体の中で最も重要な一文に二重線を引く。
- ⑤ 文章全体を百字で要約する。

100	75	50	25											